

日本も元気にする青年海外協力隊 静岡県

ここに登場するみなさんのJICAボランティアへの参加から帰国後の「今」のストーリーは、以下のURLで公開しています。

「世界を元気にした人は日本も元気にできる。」

帰国したボランティアのみなさんが、日本の地域社会の中を元気にしている姿をぜひご覧ください。

URL >>> <https://www.jica.go.jp/chubu/enterprise/volunteer/index.html>

>>> Interview 01



日本の青少年もたくましく生きてほしいと願って。

東伊豆町立図書館長
内山 淳子さん (静岡県東伊豆町出身)

ハングリー精神。無い無い尽くしても諦めないという心。人間関係の濃厚さ。利他の心。感謝の念。人生で重要なこと。夢を持ち続けることの大切さ。そして、人脈...でしょうか。さらには、視野の広がり、地球規模で物事を考える癖が身についた気がします。東伊豆町立図書館では私が館長になってからは毎年、7月29日の開館記念日に「ワールド・フェスタ世界を体験できる一日」を元青年海外協力隊の協力をかり開催しています。その前後1か月間あまりJICAの協力を得て「青年海外協力隊写真展 Be with you」も開催。教育格差や受験競争、いじめ、不登校、心の病、自殺などがある日本の青少年にも、たくましく夢に向かって自分らしく明るく生きて欲しいと願って開催しています。



派遣国 インドネシア(司書)
派遣期間 1990.07.14~1992.07.13

>>> Interview 02



派遣国 パラグアイ(小学校教諭)
派遣期間 1998.07.15~2000.07.14



途上国でのボランティアは、学ぶことの方が多くと実感。

静岡市立東豊田小学校教諭
川口 名津子さん (静岡県静岡市出身)

静岡県OB会総会に家族で行ってみたいことをきっかけに、少しずつ協力隊との接点を取り戻していきました。現在は静岡県OB会の幹事として、協力隊の応募相談や社行会のお手伝いなどもしています。ですから、私が日本でしていることと言えば、まずは本業である教諭の仕事ががんばること、できる範囲でボランティアをすることくらいです。しかもボランティアは、自分にとって楽しく、続けられることだけです。隊員経験者がよく口にする言葉に、途上国の人から学ぶことの方が多かった、ということがあります。ボランティアは双方向か、それ以上に受け取るものが多いのです。そういった気負いのない考え方は、協力隊に参加したからこそ身に付いたものかもしれません。

>>> Interview 03



アフリカの地で、自分の役割や生きる意味を再確認。

一般社団法人ワタマスマイル
菅野 芳春さん (静岡県御殿場市出身)

「いつかはアフリカに行って…」そんな思いとは裏腹に、通じない言葉、口に合わない食べ物、汚い住居など日本比でたら撒いとところはいろいろあった。「何のためにガーナに来たのか?」そんな自問自答を繰り返し、また必死で活動する。自分にできることは何でもやる。その強い思いを持って毎日過ごしていた。こんな協力隊の経験を通して、忍耐力や交渉力などの単なるスキルの向上のみならず、常に原点に立ち返って自分の役割や生きる意味を再認識することが大切だとわかった。人にはそれぞれ与えられた使命がある。そんな自分の使命を再認識することができた2年間であった。



派遣国 ガーナ(理数科教師)
派遣期間 2005.04.04~2007.07.03

>>> Interview 04



派遣国 ジンバブエ(ソフトボール)
派遣期間 2000.07.24~2002.08.07



いっぱい愛情をくれた人たちと、いつか、つながる仕事がしたい。

株式会社豆乃木代表
杉山 世子さん (静岡県浜松市出身)

貧困や搾取といった問題に深く、満足に英語さえ話せなかった21歳の私を、大きく包み込んでくれたジンバブエの人たち。教え子たちは、「私の家にも遊びに来て」と常に声を掛けてくれて、その家族は皆、決して裕福ではありませんでしたが、温かく迎えてくれました。私が帰国するとき、教え子のお母さんが、「For your Mom.」と私の母のためにエプロンを縫ってくれました。全て手縫いの真っ赤なエプロンは、とこところ繕ぎはぎがされていました。今も大切に残っています。大切にしているのはエプロンだけではなく、彼らからもらったたくさんの愛情。いっぱい与えてもらった分、今度は私がお返ししたい。その「思い」があるからこそ、私は世界と、彼らとつながる仕事がしたいのです。まだまだ道の途中ではあるけれど。

>>> Interview 05



経験した体験に誇りをもって、帰国後もアフリカを支えていきたい。

afuri代表
松下 優さん (静岡県焼津市出身)

2度のウガンダ赴任を通して現地の人々の時間の過ごし方、考え方が多少なりとも理解できているので、現在の仕事*でも、アフリカの取引先へ商品をオーダーする際は、通常の3倍以上の余裕をもってお願いするなどの工夫ができるようになりました。また、自分に自信ができました。今まではどこか保守的で、人の声を気にするところがありました。今では自分が経験した体験に全て誇りを持っています。

*ケニアレザーとマサイの伝統的な布を使った自社ブランドのバッグや小物などを販売する通販サイト会社を企業、運営

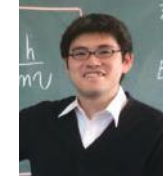


派遣国 ウガンダ(コミュニティ開発)
派遣期間 2012.09.24~2014.09.23

>>> Interview 06



派遣国 サモア(理数科教師)
派遣期間 2011.01.06~2013.01.01



日本の子どもたちにも、多文化共生の視点を。

静岡県立藤枝北高等学校教諭
小林 祐輝さん (静岡県焼津市出身)

サモアで教員として働いたことで、日本の教壇に立ちたいという思いが強くなりました。そこで、市役所に勤めながら試験勉強をし、現在は公立高校の教員として理科を教えています。大学で教職課程を取っていた時から考えると、教員になるまでだいぶまわり道をしましたが、協力隊の経験、市役所の経験、国際理解教育を学んだことが、学校現場ですべて生きています。昨年度は協力隊派遣中に他の隊員が行っていた、日本と海外の学校が一緒に一つの壁画を描く、「アートマイル」というプロジェクトに参加しました。また、学級活動のなかでは多文化共生の視点を生徒に持ってほしいと思い、多文化共生のワークショップをしています。協力隊に参加しなければ、こういう視点で教育活動を行うことはなかったでしょう。ですが、いま振り返ってみると全てが繋がっていると感じます。

>>> Interview 07



モンゴルでの経験から得たものが、その後の自分のアイデンティティーに。

ヤマハ発動機株式会社
室内 良隆さん (静岡県浜松市出身)

開発途上にある国のライフスタイルを研究してバイクを企画する社内プロジェクトに、2016年に参画しました。将来の顧客の金銭感覚や判断基準を考慮してアイデアを出す際、現地の生活水準で暮らした2年間の経験が役に立ちました。アメリカに詳しく英語を話す日本人は星の数ほどいます。しかし、小国の言葉を話し、そこに深い人脈を持つ日本人は少なく、ビジネスに不可欠な差別化につながります。青年海外協力隊をきっかけにモンゴル語とモンゴルに伝手を得たことは、その後の私のアイデンティティーになっています。



派遣国 モンゴル(コンピューター技術)
派遣期間 2006.03.27~2008.03.10

>>> Interview 08



派遣国 マラウイ(青少年活動)
派遣期間 2005.11.28~2007.11.27



ダイバーシティを肌で感じ、帰国後も「受け入れること」の大切さを実感。

青年海外協力隊静岡OB会
佐藤 健太さん (静岡県伊豆市出身)

私が帰国した頃から、「ダイバーシティ」という言葉が各地で言われるようになりました。多様な価値観を受け入れるといったことが主流でありましたが、アフリカのマラウイで2年を過ごした私にとって、多様な宗教・人種・生き方は日常のなかで当たり前であり、協力隊として「ダイバーシティ」を肌で感じたことは大きな財産となりました。仕事でもプライベートでも、多くの人と接するなかで、まずは受け入れることの大切さを感じています。

>>> Interview 09



経験から得たものの全てが、仕事にも、人生にもよい影響を。

浜松市立北浜東小学校教諭/日系社会青年ボランティア
亀久保 裕之さん (静岡県浜松市出身)

ポルトガル語とブラジル文化理解が現在の仕事に役立っています。授業で異文化理解の心を養わせたり、外国籍の児童とコミュニケーションをとったりする際に、2年間で経験したことが生かされています。その他、どんなことに対しても「まずやってみる」という挑戦する気持ちや、物事を多角的に見ようとする意識が身についたことは、仕事だけでなく、人生にも役立っていると思います。さらに、いろいろな人と積極的にコミュニケーションをとり、自分の視野をもっと広げたいと思うようになったことは、日系社会青年ボランティアでの経験に影響を受けていると感じます。



派遣国 ブラジル(小学校教諭)
派遣期間 2013.07~2015.03

>>> Interview 10



派遣国 グアテマラ(森林経営)
派遣期間 2002.07.18~2004.08.16



幸せの形は1つじゃない。その確信が、地域づくりに向き合う姿勢に。

公益社団法人中越防災安全推進機構地域防災力センター
河内 毅さん (静岡県裾野市出身)

文化や価値観、生活環境などの違いから戸惑ったことや悩んだことも多くありました。しかし、そんな戸惑いや悩みがあったからこそ、多面的に物事をとらえる視点や、日本とは違った多様な価値観や様々な幸せの形があることを学ぶことが出来たのだと思います。日本の社会では秩序を重んじられるため、自分の意見を押し殺してしまう方向に向いてしまいがちですが、多様な価値観を認め合うからこそ、多様な人たちが住みやすい場や活躍できる場もできるのだと思います。災害支援や地域づくりの現場でも、様々な人たちの意見や想いを引き出し、課題解決や地域づくりにつなげていくことが大切ですが、青年海外協力隊の経験を通して学んだことはそういった場でも生かされています。

>>> Interview 11



現地の農民のたくましさにふれ、農村に生きることを知った。

益井農法 益井園(茶農家)
益井 悦郎さん (静岡県榛原郡川根本町出身)

セネガルの農村での活動で私が一番変わったのは、価値観。農村で生きることを意味でしょうか。イスラムの教えに従い、サハラ砂漠の南下に伴い、時には限られた食料をムラの中で分けるような非常に厳しい環境の中でも、農村の人たちは遅く、楽しみながら生きています。自分が暮らす日本の山村は途上国の農村よりも、そこで暮らす人に優しく、本当に豊かでしょうか。何百年と継続されてきた文化はこれからも維持継続されていくでしょうか。自分がいなくても自立継続できるような活動にしたいと考えたことは、自分が帰国後の家で茶栽培に生きています。農業不使用栽培循環型農業をめざしてお茶を作る。モノカルチャーのリスク回避に、多品種化と製法の多様化で複数の農産品を作るようになりました。自分で考え、行動し、失敗や体験を通して、自分の住む地域に合った管理をすればオリジナルのお茶作りが、立派にできることを茶園で表現できるようになったと思っています。



派遣国 セネガル(野菜)
派遣期間 1982.01~1984.03